令和３年７月１３日発行

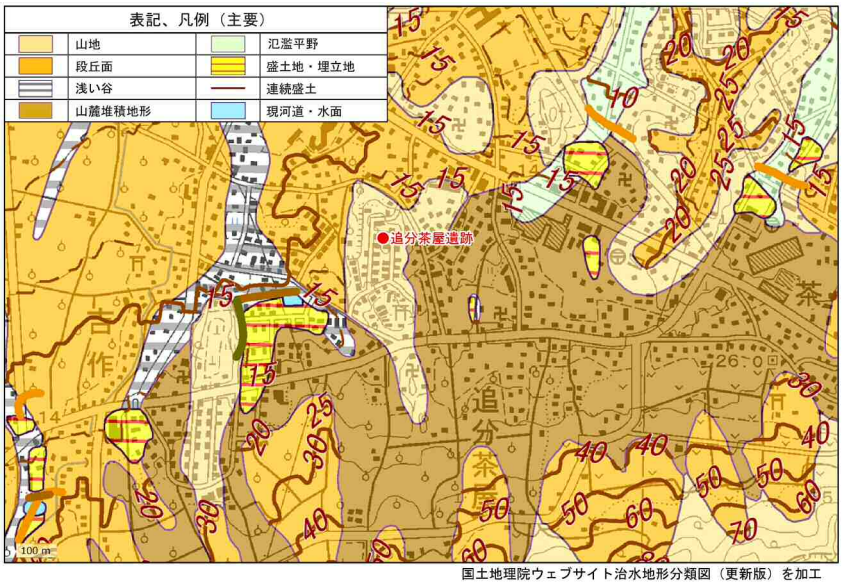
北代縄文館ミニ企画展

追分茶屋遺跡（おいわけちゃや）

追分茶屋遺跡の位置（図１）

追分茶屋遺跡は、呉羽丘陵北側の舌状台地の北端付近に位置します。標高は、２２～２５ｍで、遺跡の北側は、緩やかな傾斜をもつ段丘となっており、南側も緩やかな傾斜で呉羽丘陵へと続きます。

遺跡からは、射水平野が一望でき、北東約１．８ｋｍには、北代遺跡が所在します。



国土地理院ウェブサイト治水地形分類図（更新版）を加工

図１　追分茶屋遺跡の位置と地形分類図

追分茶屋遺跡のあらまし（図２・図３）

概 要　追分茶屋遺跡は、縄文時代中期（前葉）の集落遺跡です。昭和５８（1983）年度の調査では、竪穴住居跡５棟、埋甕（うめがめ）１基、ピット（穴）群がみつかりました。調査区の北東側に住居跡を多く確認し、住居跡からやや離れた南西側にピット群を検出しました。

遺 構　第１号住居跡（1 住）は、一部を破壊されていますが、住居の長軸は東西方向で平面形は楕円形と考えられます。大きさは、長辺 11ｍ、短辺 6.5ｍと推測され、８か所の主柱穴（P4～P11）と焼土を９か所確認しました。東西の両端近くには漏斗状の大型ピット（東側 P1 は 径 1.3m、西側 P2 は径 1m）を検出しました。

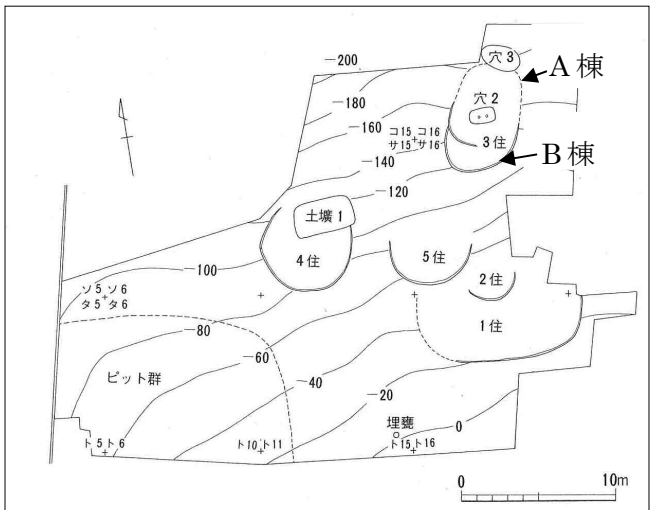


図２　遺構配置図（等高線の数字はcm）

第２号住居跡（2 住）は、第１号住居跡と重複しており東～南側のみを検出しました。平面形は楕円形と考えられ東西は３ｍを測ります。第１号住居跡と第２号住居跡の新旧関係は、検出状況から判断して第２号住居跡が新しい住居跡です。

第３号住居跡（3 住）は、２棟が重複しています。A 棟は、平面形が楕円形で東西 4.3m、南北 5.6m以上と推測されます。B 棟も平面形は楕円形で、東西 4.6m、南北 7.3m以上と考えられます。A 棟と B 棟の新旧関係は、検出状況から判断して A 棟が新しい住居跡です。

第４号住居跡（4 住）の平面形は、ほぼ円形で東西約 6.1m、南北約 5.5mです。

第５号住居跡（5 住）の平面形は、円形と考えられ、東西 5.5m、南北 2.9mを確認しましたが、北側半分は破壊されています。

埋甕を調査区南側の、住居跡やピット群から離れたところから検出しました。土器の底を、欠いた状態で底部を下にして置かれており、残存部分は高さが 25ｃｍです。口縁部は失われていますが、残存部の最大径は 40ｃｍです。埋甕の中に遺物等はありませんでした。

調査区南西部の約１５０㎡の範囲にはピット群があり、約１００基を確認しています。大きさは径 1m～20ｃｍで大小さまざまで、平面形は円形や楕円形です。縄文土器や石斧が出土したピットがあります。

土坑１は、時代が不明です。東西 3.6m、南北 2.3mの長方形で、浅い所は 40ｃｍ、深い所は 80ｃｍほどです。

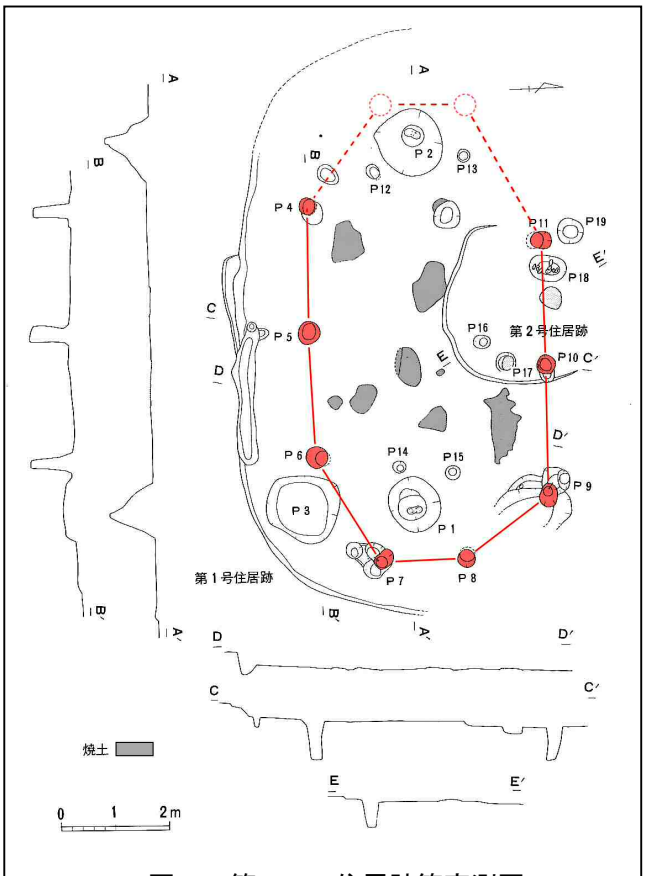


図３　第１・２住居跡等実測図

遺 物　出土遺物は、縄文土器、土製品、石器等です。遺物は主に、住居跡やピット群から出土し、土器の多くが細片でした。縄文土器は主に、中期（前葉）の新崎（にんざき）式です。

土製品は、土偶が出土しています。土偶は、眉や鼻をＹ字形の粘土紐を使い、目や口を刺突（しとつ）して表しています。

石器は、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石匙（いしさじ）（一端につまみ状の突起があり、するどい刃部（じんぶ）をもつ石器）等が出土しています。

図４　出土した土器や石器等

第１号住居跡について

第１号住居跡は、県内で見つかっている縄文時代の住居跡では大型の部類に入ります。その他の大型住居では、朝日町の不動堂遺跡２号住居跡が長辺 17m、短辺 8mで 14 本の主柱です。住居跡の時期は、中期前葉です。砺波市の松原遺跡４号住居跡は、長辺 11.2m、短辺 7.0mで 12 本の主柱です。住居跡の時期は、中期中葉です。

明確な基準はありませんが、長さが 10m以上のものを大型住居と呼んでいます。大型住居は、東北から北陸に分布し、集会所、共同作業所、共同住宅などの用途説があります。

追分茶屋遺跡第１号住居跡や不動堂遺跡２号住居跡、松原遺跡４号住居跡は、大型住居の範疇にはいります。用途については、今後の研究等による解明が待たれます。